



博士（人間科学）学位論文 概要書

日本におけるバイオエシックスの動態と変動

Dynamics and Change of Bioethics in Japan

2004年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

木村 利人

Kimura, Rihito

博士学位論文（後期日程）概要書

日本におけるバイオエシックスの動態と変動

木村 利人

本論文においては、私はバイオエシックスは全体として一つにまとまりを持った「いのち」に関わるあらゆる価値観と判断の問題を、グローバルなスケールで再考し、伝統的な学問の枠組みやその専門的研究領域を超える発想で新しく問題提起し直し、その解決のための価値判断の選択肢を具体的に提示しつつ、その内容を学問的に体系化すべき学問として構想した。

1980年以降私が研究活動の本拠としてきたジョージタウン大学ケネディ倫理研究所はじめ早稲田大学人間科学部でのバイオエシックス研究と教育、実践の20年にわたっての積極的な学問的インプットが本論文の各章において取り扱われた。

第一章において、バイオエシックスの日本における全体像を概括し、その上で遺伝、死、移植、倫理委員会、臨床治験、高齢者問題などバイオエシックスの基本的理念にかかわりを持つ分野の動態の解明を試みた。

これらの各章での考察に当たっては、いのちをめぐる価値判断の問題が各専門的学問分野の展開とともにあまりに細分化され、複雑化し、極度に専門化され分断され、いのちの主体である人間の尊厳が無視されてしまったことから生まれた様々な弊害と、特にいのちの破壊、人権侵害への実情と反省とをふまえて執筆された。

このような発想と理解からすれば、バイオエシックスを、その語源に由来するギリシャ語の *bios* と *ethikos* を単に組み合わせただけの *Bioethics* (*Bio-Medical Ethics*) とする殆どの欧米先進諸国の研究者や、それを単に日本語に置き換えて「生命倫理」または「生命倫理学」としてしまう研究者と私の説とはそのアプローチに根本的な差異があることが明確である。

つまり、「バイオエシックス」は、倫理学、医学、看護、宗教、法学、政治、経済、公共政策、哲学、歴史、教育など旧来の学問の枠組みを超えた全く新しい「超学際的」な学問体系なのである。これは、私自身のイマジネーションの展開として構想され、この学説の普遍性と独自性を持った内容が注目を浴び、

諸外国の研究者により紹介や引用されてきた。

従って、医療や生物・生命医科学の研究と臨床の分野における倫理問題の解決のための道具としての「応用倫理学」の一分野としての「生命倫理/学」とバイオエシックスを定義するのには問題がある。これでは、バイオエシックスを倫理学に還元することになり、あまりに一面的で、この新しい学問の内容の広がりや展望が正しく把握出来ないからである。

この新しい学問体系としてのバイオエシックスへのイメージの背景には、1960年代からの真の人間解放を目指しての世界的な各国の人々との連帯による人権運動、反差別、女性解放や環境保全と健康増進、開発や平和の問題更に当時大きな展開を見せた「ベトナム反戦」運動とも重なり合うグローバルな、「いのちを守り育てる」ためのグラスルーツの人権運動が各地で生じたことへの統合的な理解と社会の変動への期待があったことは言うまでもない。日本におけるバイオエシックスの動態と変動をめぐって、このようなささやかな論稿をまとめたことを通し、これらが更なる未来を展望するための一助となることができれば考えている。